

新年にあたって

日高農業改良普及センター 所長 松井 克行



新年あけましておめでとうございます。

組合員の皆様には、新たな気持ちで輝かしい初春をお迎えのことと存じます。

また、皆様には平素から普及センターの活動全般にわたり深いご理解と温かいご支援を賜り、心から感謝を申し上げます。

さて、昨年を振り返りますと、気象については、6月上・中旬並びに8月上・中旬に気温の低い時期がありました。7月は気温が高く経過するなど、平穏な気象ではありませんでした。一昨年は3つの台風が北海道に上陸しましたが、昨年18号崩れの低気圧(当初北海道上陸とのことであったが、後に温帯低気圧で北海道通過ということ)で気象庁より修正)のみでした。しかし、この低気圧により

ビニールハウスの損傷や飼料用とうもろこしの倒伏など被害をもたらしました。改めまして被害に遭われた方には、心よりお見舞い申し上げます。

一方で、作柄は総じて平年並から上回る結果となり、組合員皆様の高い営農技術と適切な栽培管理の賜と、心より敬意を表します。

品目別につきましては、水稲は移植作業は平年並に終了し、作業期間中好天であったことから、苗傷みも見られず順調なスタートとなりました。6月上・中旬の低温により初期生育が遅れましたが、7月上・中旬の高温により回復し、出穂期は平年並となりました。出穂後は再び低温となり、成熟期が遅れ収穫作業も平年に比べ5日程度遅くなりました。登熟期間は低温で推移しましたが、日照時間が確保され、千粒重は平年より重くなり、作況指数は103のやや良となりました。

園芸の主力作物であるミニトマトにつきましては、8月上旬の低温により生育がやや遅れ、収量にも影響がありました。その後回復し、生育終盤まで順調に収穫することができました。年間収穫量は前年に比較し、単収の増加と作

付面積の増加もあって前年を上回り、販売額は9億円を超え、過去最高となりました。

黒毛和種牛につきましては、北海道市場で取引された素牛の出荷頭数及び平均価格ともにほぼ前年並に推移しました。一頭当たり単価は、堅調に推移しています。

軽種馬においては、4回の市場で売却総額が116億円と過去最高額を記録し、売却頭数、売却率も前年を上回る結果となりました。

さらに、ホッカイドウ競馬におきましても、馬券販売額が246億円と2年連続で200億円突破を記録し、競馬人気の回復を実感できる結果となりました。

牧草は、一番草・二番草共に概ね平年並の生育で推移し、収量は概ね平年並となりました。収穫作業時期が好天に恵まれたため、良質な乾草が確保されました。

飼料用とうもろこしは、6月の低温により生育は遅れ気味で推移していましたが、7月の好天で回復しました。しかし、9月18日、19日にかけて、台風18号崩れの低気圧通過によって倒伏が発生しました。この倒伏の影響により収穫作業もやや遅れました。収量は平年を上回りましたが、倒伏によるサイレージの品質低下が懸念されるところです。

農業を取り巻く情勢につきましては、日欧EPA交渉が昨年12月

に最終合意に至り、TPP協定は、昨年11月に米国を除く11カ国で大筋合意されました。

両協定共にまだまだ不透明部分が多い状況にありますが、発効されると日本農業及び北海道農業に大きな影響を及ぼすことは間違いありません。政府はその対策としての予算を措置するなどの動きがありますが、引き続き状況の変化に注視しなければなりません。

国内では、新たな収入保険制度が導入され、平成31年1月から開始されます。また、米政策でも直接支払交付金が平成30年産から廃止となるなど農業政策は、めまぐるしく変化しています。これに対応するためには、その都度政策に対応した戦略をたてる必要があります。したが、政策が多少変化しても影響しない長期的な戦略を、我が家の経営のみならず、地域農業・地域社会全体で検討することも肝要と考えます。

普及センターは、関係機関と連携しながらこれら情勢の変化に対応し、「共に考えていく活動」を進めてまいります。皆様の一層のご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本年が皆様にとりまして健康で希望に満ちた良き年となり、また、豊穡の年となりますことを心よりご祈念申し上げます。年頭のご挨拶といたします。